

研究ノート

生徒指導と連携した教育相談について ～進路指導を含めたガイダンスとカウンセリング～

西 村 宗一郎

北里大学海洋生命科学部

I. はじめに

国際化、高度情報化社会の進展や、少子高齢化の進行等により、児童生徒を取り巻く環境は、劇的に変化をしている。

さらに、日本の高校生は、「自分を価値ある人間だ」という自尊心を持っている割合が米中韓の半分以下の39.7%であり（図1）、「自分はダメな人間」を「よくあてはまる」と思うと考える高校生の割合は、1980年（12.9%）から2011年には3倍（36.0%）になった。（図2）このような自己肯定感の低さが大きな課題である。¹（「まああてはまる」は、45.6%から47.7%で微増）

このような状況で、学校における生徒指導は、「児童生徒の問題行動等の背景には、規範意識や倫理観の低下が関係しているとも指摘されています。このような状況において、学習指導要領に定められているように、生徒指導は、一人一人の児童生徒の人格を尊重し、個性の伸長を図りながら、社会的資質や行動力を高めるように指導、援助するものであり、時代の変化にも対応しながら、学校段階に応じた生徒指導を進めていくことが求められています。生徒指導は、学校がその教育目標を達成するための重要な機能の一つであり、児童生徒の人格の形成を図る上で、大きな役割を担っています。」と「生徒指導提要・まえがき」（2010年3月）にも述べられている。

本稿では、学校における生徒指導の教育相談体制の強化について、一人一人の生徒への支援として高校を中心として考えた。あわせて多くの自己肯定感の希薄さからくる生徒の悩みである進路希望についての支援としての進路指導の目指すべき方向について考えた。

キーワード：生徒指導、教育相談、進路指導、カウンセリング、キャリア教育

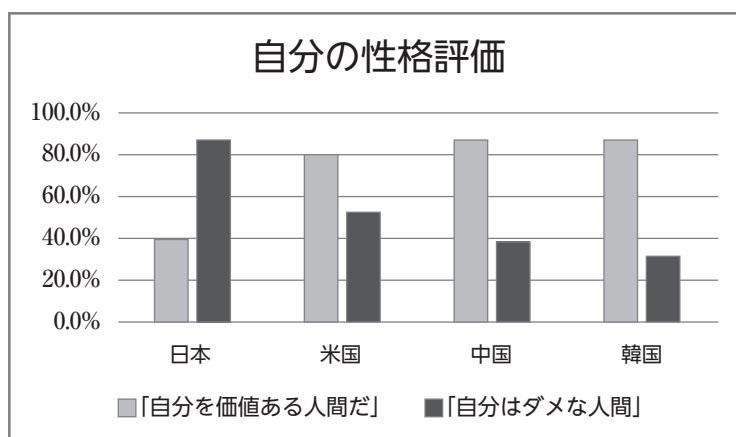


図1

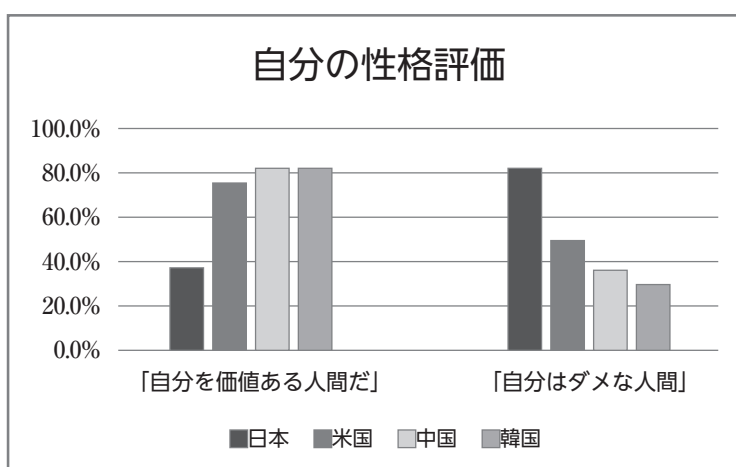


図2

Ⅱ. 生徒指導の現状

生徒指導についてのイメージを、本学の教職課程を履修している学生に高校までの学校生活の中での経験を問うと、特定の教員の服装や体型を答える学生が意外と多いことが見受けられる。これは、生徒指導を、基本的生活習慣など子どもの生活面の指導、問題行動を起こさせない指導、問題行動を起こしたときの対処などを連想していることに他ならない。一部の熱心な教員や教員集団による児童生徒集団の学校生活における秩序の維持や授業規律のための訓育的な生活指導=生徒指導として受けとめられていることが窺える。これは生徒指導を領域概念としてとらえ、機能概念としての生徒指導としてとらえられていないことが窺える。

問題行動への対処が必要とされる現在の教育界では、生徒指導の重要性が説かれ、学習指導と生徒指導は並列に存在するものではなく、機能概念説が教育現場では定着している

はずであるが、実際に学生たちの実感としては、生活指導のみの経験が色濃く残り、学校生活の中で児童生徒一人一人を考慮することなくそれぞれの所属する集団として扱われ、特に生活指導に熱心な教員が非寛容であるように受け止められていることが考えられる。しかし、小学校、中学校、高等学校と新たな集団に児童生徒が属した場合の初期の生活指導の必要性は、重要であり、特に、新入生ガイダンスやオリエンテーションを徹底して行うことは大切である。

学生が、上記のような感想を抱くのは、それぞれの発達段階に応じた児童生徒一人一人に対する支援（カウンセリング）としての開発型教育相談の実感がなく、生活指導（ガイダンス）が児童生徒を集団として捉え、基本的生活習慣、生活態度や行動を非寛容な規制として型にはめられているような印象が学校生活の中で常に行われていたとの考えていたことが窺える。

多くの学校で、生育環境等が違う子供たち個々の教育的ニーズに対する「教育相談」のプロセスを通した校内支援体制が、つくられているはずであるが、十分に機能していなか、ぜい弱であったりしていることが窺える。

本来の生徒指導は、こうした現状の中で、様々な悩みを抱える児童生徒一人一人に対して、きめ細かく対応するためには、学校とともに、多様な専門家の支援による相談体制をつくっていくことが必要であり、相談窓口を保護者、児童生徒に周知することが求められていると考える。

Ⅲ. 児童生徒をめぐる状況

物質的な豊かさにあふれ、高度情報化、都市化、少子高齢化、核家族化等の家族構成の変化の進行などの現代社会の大きな変容の中で、家庭の教育力や地域社会の機能の低下が著しい。また、児童生徒の抱える問題が多様化し、深刻化する傾向も見られる。

このような現代社会の変容は、ストレスの増加を生み出しており、児童生徒の学校及び学校以外の機関への多様な種類の相談の増加（スクールカウンセラーを導入した1995年度と比べ、都道府県教育委員会・指定都市教育委員会が所管する教育相談機関に対する相談件数は実質的に1.7倍 文部科学省調査）に見られるようにストレスを抱える者が多くなってきているといえる。

こうした現状の中で、様々な社会問題に対して、学校が対応しきれずに責任を追及されたり、学校に対する過剰な要求や過大な期待により、教員の負担感や勤務時間が増え、その結果、学校において最も大切であるはずの児童生徒一人一人と向き合う時間や機会が少なくなっている。実際に、教員の児童生徒の指導に直接間接的にかかわる業務時間が、教員平均として小・中・高校とも、8時間近くとなり、残業時間も2時間弱となっている。²

Ⅳ. 教育相談体制の強化

日本の教育相談は、戦後アメリカをモデルに構築され、生徒指導の一環として位置づけられている。教育の目的が「教育は、人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない。」として教育基本法に掲げられている。しかし、敗戦による経済復興とその後の経済成長のための貢献者の育成を学校教育の中に求められて、適応できない児童生徒については個人の問題として多く処理されてきた。しかし、GDPが世界第3位となり経済発展を遂げ経済大国となった日本において、個人の幸福感や生き方が多様化する現在において、児童生徒の個人の成長・発達を促すための援助としての教育相談の役割の重要性や、在り方が問われてきている。

こうした中で、教育相談の意義は、生徒指導提要（第4章）では「中学校学習指導要領解説（特別活動編）によれば、『教育相談は、一人一人の生徒の教育上の問題について、本人又はその親などに、その望ましい在り方を助言することである。その方法としては、1対1の相談活動に限定することなく、すべての教師が生徒に接するあらゆる機会をとらえ、あらゆる教育活動の実践の中に生かし、教育的配慮をすることが大切である。』とされている。

すなわち、教育相談は、児童生徒それぞれの発達に即して、好ましい人間関係を育て、生活によく適応させ、自己理解を深めさせ、人格の成長への援助を図るものであり、決して特定の教員だけが行う性質のものではなく、相談室だけで行われるものでもありません。

これら教育相談の目的を実現するためには、発達心理学や認知心理学、学校心理学などの理論と実践に学ぶことも大切です。また、学校は教育相談の実施に際して、計画的、組的に情報提供や案内、説明を行い、実践することが必要となります。」と記されている。

1. 教育相談の支援体制

神奈川県は県立高校に勤務した経験から高校には、学級担任を始め、教育相談コーディネーター教員³、養護教諭、生徒指導に係わる教員、教科担当者や部活動の顧問など様々な立場の教員がいる。神奈川県ではスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーも配置⁴されている。このように、一人の生徒をめぐる様々な教員等が多様なかわりを持つことができることが特徴であり、アドバンテージであるはずである。

しかし、現実の学校現場では、教員の多くが高度経済成長の中で、学校教育を経験したことから、一部の教員の中には問題行動を起こす生徒について、学校や教員が困っているという発想で、生徒の「困り感」を共有しにくい傾向がみられる。また、生徒指導に自信がある教員や、逆に、他の教員に相談することで資質を問われるのではと考える教員が、個別の生徒の「教育的なニーズ」を抱えてしまい、情報の共有や連携が滞り予防的措置が

遅れて、初期対応の遅れから解決が困難になる傾向がみられる。

そのため、学校における教育相談を定着させるためには、組織化が必要であり、教員組織における信頼関係が構築され、学校としての指導目標を確立させて、一貫したチームとしての対応が必要である。教育相談係一人の努力では、教育相談活動の仕事量が膨大であり無理がある。神奈川県立高校では、教育相談コーディネーター教員が各校に一人以上配置されており、教育相談会議のコーディネート・教育相談の年間計画の作成や、外部諸機関との連絡業務を担っている。以下、具体的な高校における教育相談活動の実際についてまとめた。

①情報の収集と共有

学校には、様々な個性を持つ生徒がいて、学習や集団活動などで困難が生じ、苦しんでいる状況がある。

また、学習が遅れている子どもや心に課題を抱えている子ども、学校に行くのを渋っている生徒、さらには、学習が進んでいる生徒も、ある時点、状況下においては、自分だけでは解決できない課題（教育的ニーズ）を抱えていると考えられる。

こうした困難が生じている生徒に気づくのは、本人の訴えはもちろん、保護者の気づき、担任の気づき、また、関係する教職員や友だちの気づきからである。そして、このような気づきのきっかけとなるのは教育相談である。

特に、生徒、保護者からの訴えに基づき、個別支援シートを作成することで、学校・保護者、場合によっては、外部機関との連絡がスムーズに行なえる。（資料1）（実際には、支援シートⅠは、高校入学時に中学校での支援の状況を保護者がコピーを提出するものであるが、実際には、ほとんど提出されない。小学校から中学校への連携はうまく行われているようであるが。）

その気づきから、困難さを把握し、そしてチームによる方針や具体的な手だてを検討し、支援の実施・評価を行い、必要に応じて関係機関との連携にもつながる。⁶

②教育相談コーディネーターの役割

教育相談コーディネーターは、学校としての組織的な取組として、教育相談のプロセスをいかして、多様な教育的ニーズのある生徒を支援するための、校内の連絡調整、生徒・担任・保護者のニーズの把握、ケース会議の運営、関係機関との連絡・調整などを行うキーパーソンである。生徒を直接支援する担任や保護者もまた、支援を必要としており、組織で支援にあたるとき、その組織で中心になって動く役割を担う人材である。⁶

神奈川県では、2004年から総合教育センターで教育相談コーディネーターの養成研修を行い、各県立高校には一人以上の教員がいる。（2015年度は、32名（計画）の養成を行っている。）

③スクールカウンセラーの役割

神奈川県教育委員会では、いじめや不登校、暴力行為などの課題解決を図るため、心の専門家であるスクールカウンセラーを拠点校方式でとして配置（県立高校60校）して全県立高校をカバーし、生徒や保護者、教職員の様々な悩みに対して、専門的な知識・経験に基づいて適切に相談に応じている。また、教育委員会には、スクールカウンセラーへの指導助言等を行うスーパーバイザーを置いている。

なお、全国のスクールカウンセラーの配置校数は、1995年度の配置事業開始の153校から、2014年度の23,800校（計画）までの推移は、図3に示すように自治体により異なるがほぼ100%近い配置になっている。

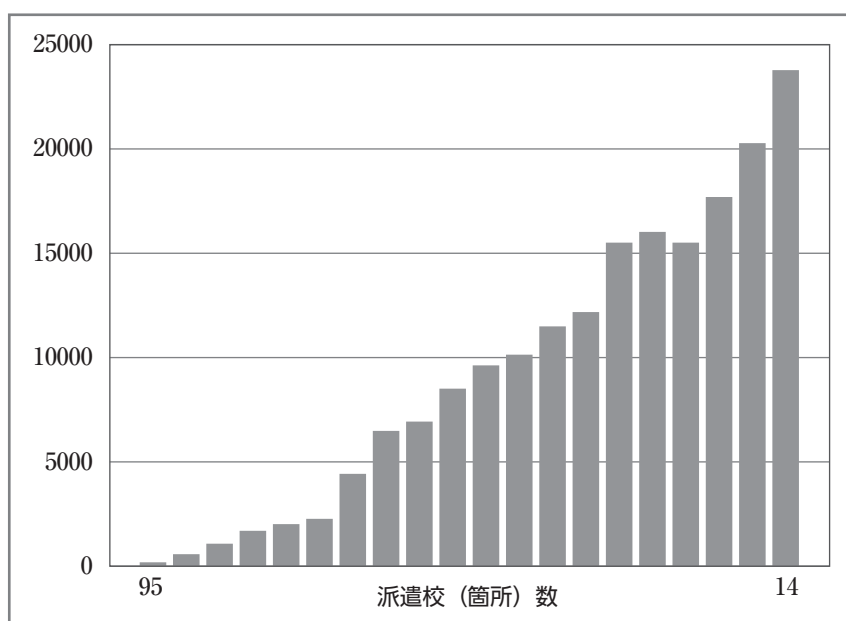


図3 （文部科学省）

④ボランティアの活用

私の勤務した神奈川県立〇高校では、臨床心理士の資格取得を目指す大学院生4、5名が週1回保健指導部の総括教諭や養護教諭と連携してボランティアとして相談業務に携わっている。生徒にとっては、年齢も近いことでもあり気軽に相談でき、院生にとっても将来の相談業務に役立ち、双方ともに効果を上げている。

⑤ケース会議

ケース会議とは、児童・生徒本人や児童・生徒を支える人の困っていることに対応してチーム（児童・生徒の支援にかかわる人たち）で話し合う会議であり、ケース会議には決

まりはない。会議の時間も出席者も、こうでなければいけないというものもない。

教育相談コーディネーターが、児童・生徒のことで困っている同僚がいたら、積極的に話しかけ、その児童・生徒にかかわっている教職員と一緒に対他の仕方を話し合ってみるよう提案してみることから始めることである。⁶

私の経験から、これからケース会議を開くのであれば、スクールカウンセラー等、外部の人が来校した日に設定をして、それをきっかけにしてみると、話し合いもスムーズに進み、初めての人も参加しやすい雰囲気が醸成された。また、ケース会議の中での例ですが、A教諭から「クラスのB君は最近遅刻が目立つので困っている」と相談を会議に出したところ、C教諭から「そのような軽微なこともこの会議で相談してもよいのか、実は、私も…」これ以降、当該の学年からは、様々な教育相談事項がケース会議に持ち込まれ、成果を上げた。

⑥コンサルテーション

コンサルテーションとは、支援を必要としている人（学校の場合には子どもや保護者）に直接的に支援するのではなく、その人に関わっている人（学校の場合には担任の先生や教科担当の先生など）に間接的に支援することをいう。

例えば、教育相談センターの相談担当者は「コンサルタント」として、支援を必要としている子どもに直接関わる「コンサルティ」である担任の先生に、支援のヒントになりそうなことを伝え、そのヒントをもとに、担任の先生が子どもの支援にあたることになる。

なお、「コンサルタント」と「コンサルティ」は、「タテ」の関係ではなく、立場や役割・専門性の違いを尊重する「ヨコ」の関係である。

同じ学校の中でも、教育相談コーディネーターの先生が「コンサルタント」として、担任の先生にコンサルテーションを行う場合もありますし、また、スクールカウンセラーや特別支援学校の先生が「コンサルタント」として教育相談コーディネーターの先生にコンサルテーションを行うことも考えられる。⁷

2. カウンセリング

学校におけるカウンセリングの基本は、「傾聴」と「共感」である。「傾聴」とは、生徒から聞いたことを心で受け止める能動的な行動である。「共感」とは、他人の体験する感情や心理状態、あるいは人の主張などを、自分もまったく同じように感じたり、理解したりすることである。感情移入や同上、憐れみ、同感とは異なり「あたかも同じように感じ」、それでいて「巻き込まれない」感じ方のことである。「傾聴」と「共感的理解」により生徒との対話的な教育相談が望まれる。⁸

さらに、「汝自身を知れ」というのは、ソクラテスの名言があるが、困難を生じている生徒の多くは、自分自身を自己としてしか認識できずに、自分自身を非自己の自分から自分を

見つめることが難しいことが窺える生徒を多く見かける。このような生徒は、「嫌なことはやらない」「やりたいことはやる」という思考や行動をとる傾向があるので、「嫌だけれどもやってみよう」「やりたいけど我慢しよう・やめよう」といった社会で現実的に行われている思考や行動を心の中で育てることがカウンセリングの場面で必要である。

V. 進路指導におけるキャリア教育

生徒指導における進路相談も重要な課題である。多くの高校生の悩みは、特に進路・学習領域で発生している。生徒は、高校在学時においては、自分自身の進路や学習について、かなりの時間を不安な状態で過ごしている。この事実を理解し、学校は生徒への支援内容について考える必要があると思われる。⁹

従来行われてきた進路指導は、本人の適性と職業の特性の合致点を見つけることに力を注ぐマッチング理論の考え方で行われてきた。

しかし、高度情報化による産業構造の急激な変化や技術革新、また、グローバル化等による激しく変化する現代社会において、高校卒業時等にマッチしていた進路選択が、生徒の生涯においてマッチしたものとして続くとは限らない。人生の途中で、本人の職業希望が変わることもあれば、職業の内容そのものがダイナミックに変化していく。つまり、マッチング理論だけでは通用しない社会構造になってきている。このような社会を生き抜くためには、自らの進路を考えながら、キャリア形成能力を育成する必要がある。

キャリア教育は高校における教育活動すべての中に位置づけて行うために、2004年度に基本的方向を盛り込んだ「かながわキャリア教育実践推進プラン」を作成した。

進路選択や進路実現、職業意識など進路に関する諸能力は、年齢や成長に応じて発達していくものであり、ある時点で進路目的を達成すればそれでゴールという性格のものではないという考え方に立った進路指導が求められている。

変化の激しい社会を生きていくために、ライフキャリアの視点から、希望に応じた情報収集とその後の人生設計への見通しを育成することが重要である。そのために、生徒に卒業後の具体的な進路を考えさせ、実際の進路選択と進路決定を行うことが当然必要となる。

これからの進路指導の在り方として、生徒の生涯にわたるキャリア形成の能力を身に付けさせるために、キャリア発達の考え方を基本とし、生徒の年齢や発達段階に応じた職業観を育成や職業や進路に関する情報収集や分析能力を高め、実際の職業観を育成し、インターンシップ等などの体験を通じて、生徒の生涯にわたるキャリア形成の基礎能力を身に付けさせることが必要である。そのためには、生徒指導・教育相談で行われている手法を用いたキャリアガイダンス・キャリアカウンセリングによる進路相談を行うことである。¹⁰

神奈川県教育委員会では、2005年4月に「かながわキャリア教育実践推進プラン」を策

定した。これは、2008年度からすべての県立高校において、学校ごとに指導計画を作成し、それに基づくキャリア教育を展開することを目標とするものである。

計画の実現に向けて2005年度からすべての県立高校で「キャリア教育実践推進事業」を展開している。(資料2)

Ⅵ. まとめ

生徒指導において、多くの学校で生徒指導部に属する数人の教員が、基本的な生活習慣など子どもの生活面の指導、問題行動を起こさせない指導、問題行動を起こしたときの対処による児童生徒集団の学校生活における秩序の維持や授業規律のための訓育的な生活指導＝生徒指導が行われていることが連想される。生徒指導提要でもふれている生徒指導の意義として、一人一人の児童生徒の人格を尊重し、個性の伸長を図りながら、社会的資質や行動力を高めるように指導、援助するものであり、児童生徒の人格の形成を図ること(傍点筆者)の取組がはなはだ弱いことが窺えた。また、本稿では触れていないが、昨今の「児童生徒の自殺」や「いじめ」等の問題発生時の学校の対応を見ると、児童生徒にとって安全安心な場所である学校において、そのような問題に対して、予防的な視点が上で、リスクマネジメントや、発生時におけるクライシスマネジメントが職員に徹底されておらず混乱が見受けられる。

このような現状から、生徒指導の本来の目的を果たすために、外部人材の活用も考えた組織的な対応による日ごろからの児童生徒の見取りから「困り感」を把握して、カウンセリングマインドをもって児童生徒一人一人の発達段階に応じた教育相談体制を強化することが重要である。

進路指導においても、高校の視点から、高校生の約4割が学校の授業時間以外にまったく、またはほとんど勉強をしない生徒が増えており、基礎学力の不足や学習意欲の面での課題があり、将来の生き方・働き方について考え、選択・決定することなく、進路意識や学習に対する目的意識が希薄な児童生徒が増えていることを踏まえて、従来行われてきたマッチング理論に基づく本人の適性と職業の特性の合致点を見つける進路指導ではなく、変化の激しい社会を生き抜く力としてのキャリア形成能力育成を目指したキャリアガイダンス・キャリアカウンセリングによるキャリア教育が重要である。

引用文献

1. (財)一ツ橋文芸教育振興会、(財)日本青少年研究所「高校生の生活意識と留学に関する調査報告書」(2012年4月)
教育再生の実現に向けて 文部科学省(2014年3月28日)

2. 文部科学省、「教育相談等に関する調査研究協力者会議報告 児童生徒の教育相談の充実について—生き生きとした子どもを育てる相談体制づくり—（報告）1 学校における教育相談の充実について」（2007年7月）
3. 神奈川県教育委員会、「平成 26年度 神奈川県児童・生徒の問題行動等調査〔速報値〕調査結果の概要」（公立学校分）（2015年）
4. 再掲3
5. 神奈川県教育委員会、「支援が必要な子どものための『個別の支援計画』～「支援シート」を活用した「関係者の連携」の推進～（改訂版）』（2006年）
6. 神奈川県立総合教育センター、「はじめようケース会議 Q & A」（2009年）
7. 神奈川県立総合教育センター、教教育育相相談談コーディネーターハンドブック「チームアプローチ&ネットワーキングハンドブック（教育相談コーディネーターのためのQ & A集）」改訂版（2006年）
8. 原田真理編著、「教育相談の理論と方法 中学校・高校編」玉川大学出版部（2015年）
9. 静岡県立総合教育センター、平成19年度 「研究紀要」第12号「高等学校におけるこれからの教育相談の在り方に関する研究 —研究協力校の取組と「悩み」の実態調査を通して—」（2008年）
10. 神奈川県立総合教育センター、「キャリア教育推進ハンドブック」（2009年）

資料 1-1⁵⁾

支援シートⅠ これまでの支援 これからの支援

ふりがな 氏 名	所 属 機 関	記入日	相談メンバー
↓			

*記入者には○印をつける

項 目		内 容	
こ れ ま で の 取 組	所 属 機 関	＊本人・保護者から聞き取り相談する内容をここに記入する (例) どんな学習をして何ができるようになりましたか どのような学習の方法がよかったですか 学んだことで家庭生活や地域生活で活用されていることは何ですか	
	家 庭 生 活	(例) 家庭ではどんなふうにご過ごしていますか 何か困っていることはありますか 家でできるようになったことは何ですか	
	余暇・地域生活	(例) 休日はどんなふうにご過ごしていますか 何か困っていることはありますか 地域の人にどんな協力をしてもらっていますか	
	健康・安全・相談	(例) 健康や食生活について配慮してきたことは何ですか 医療面で安心できるようになったこと、心配なことは何ですか 何か困ったときの相談相手は誰ですか	

これまで の取組 の評 価		<p>(例)</p> <p>今までで一番成果があったことは何ですか</p> <p>これから継続していきたいことは何ですか</p> <p>次のステップは何ですか</p> <p>「こうしてほしい」と思うことは何ですか</p>
	*子どもに応じた項目を記入する	

こ れ か ら の 計 画	これからの方針	(例) 何を一番大切にしていきたいですか どんな人とのネットワークを広げたいですか
	所 属 機 関	
	家 庭 生 活	(例) 今後どんなことに取り組んでいきたいですか そのために必要な支援は何ですか
	余 暇 ・ 地域生活 卒 業 後 の 生 活	
	健康・安全・相談	

資料 1 - 2 ⁵

支援シートⅡ 支援の内容と役割分担

氏 名 <small>ふりがな</small>		所属機関	
記入日		相談メンバー	
見直し日		相談メンバー	

*記入者には○印をつける

課 題 または ニーズ	
-------------------	--

項目	どこで 機 関	だれが 担当者	どんなことを 支援の内容	見直し 予定日	見直し 評 価
所 属 機 関					
家 庭 生 活					
余 暇 ・ 地 域 生 活					
健 康 ・ 安 全 ・ 相 談					

資料 2

キャリア教育のイメージ図

《諸能力》進路発達を促すために育成すべき具体的な能力・態度

